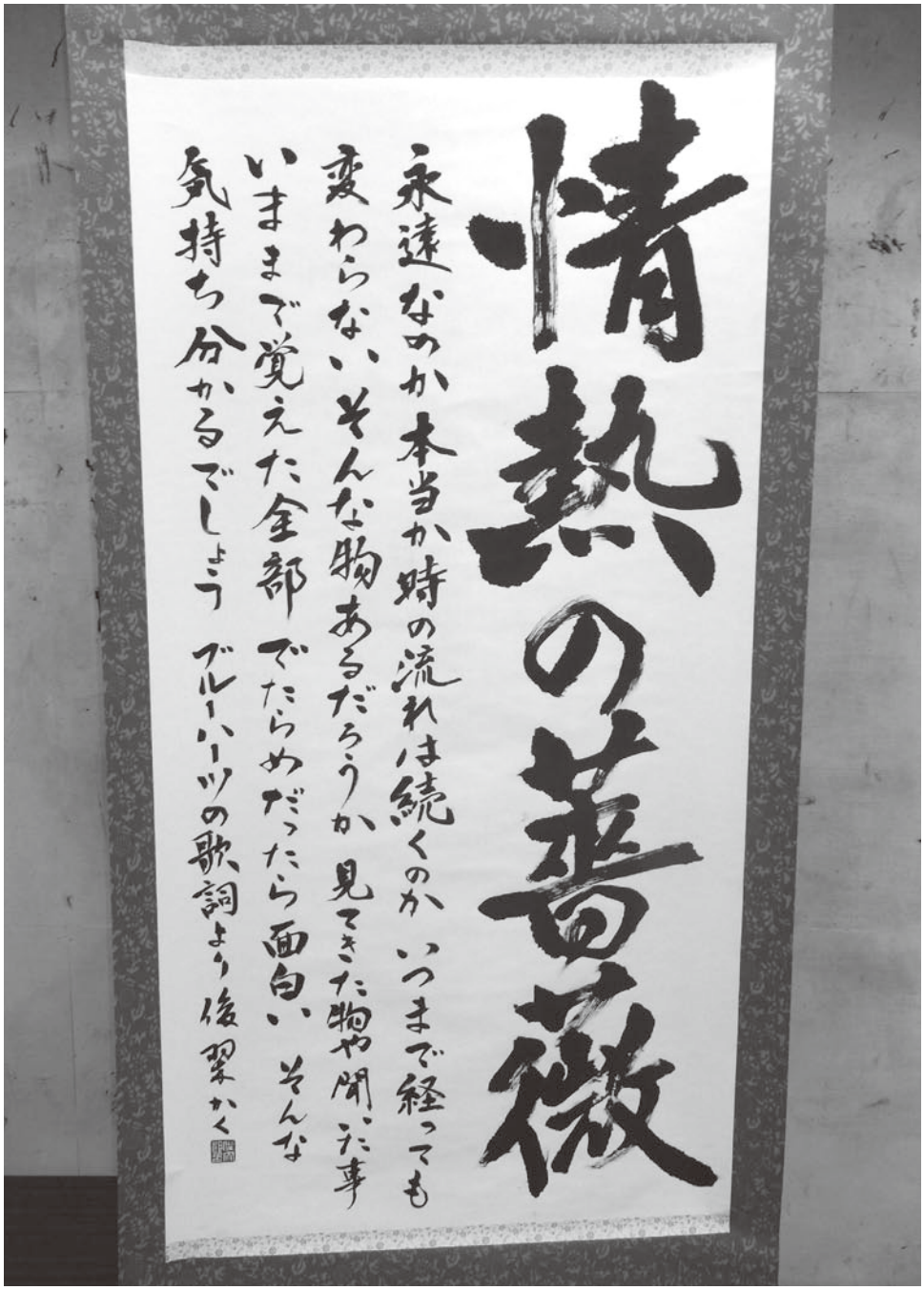
新企画

中央大学書道會

HAKUMON Chuo 書展

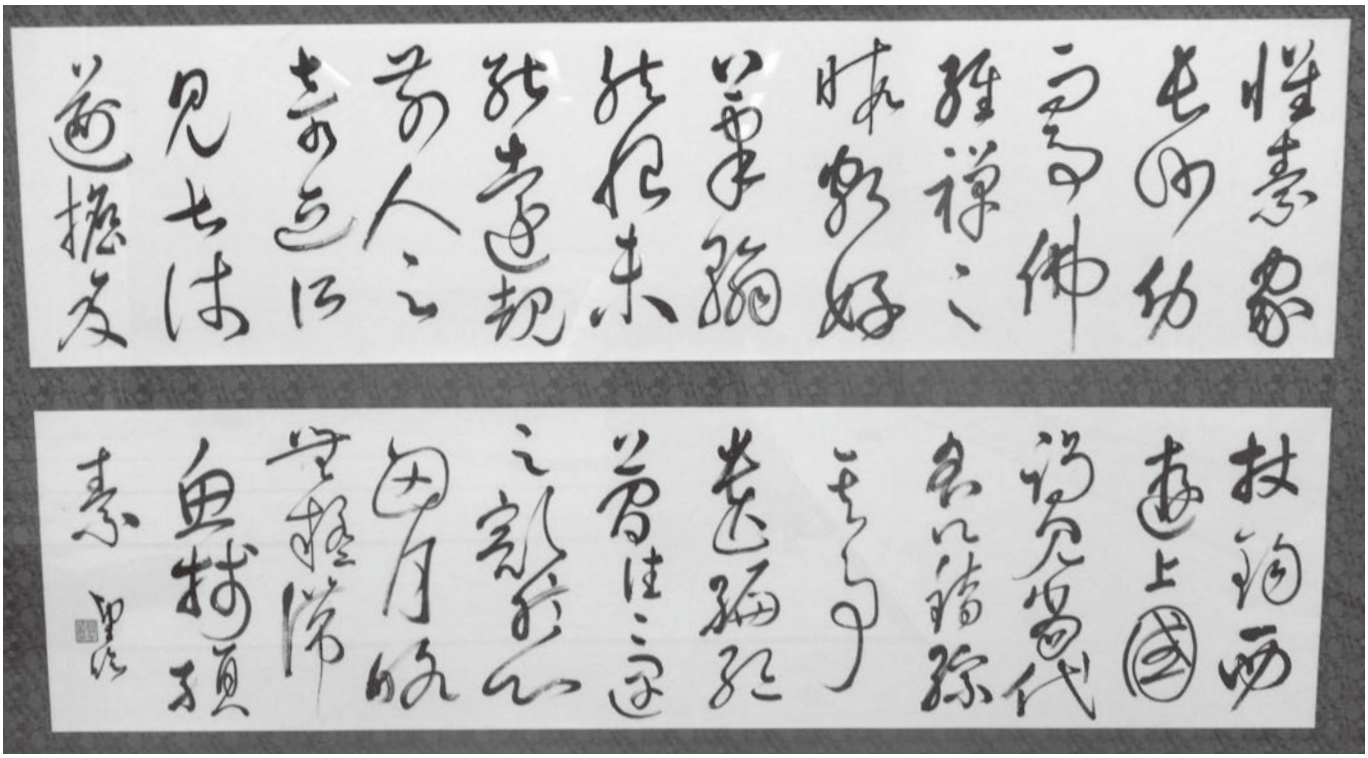
今号から中央大学書道會による誌上書展を始めます。題して「HAKUMON Chuo書展」。作品は「中央大学アートフェスティバル学長賞受賞作品」など“書の魅力”を感じさせる力作ばかりです。パソコン、スマホ時代にあっても「手紙は手書きにすべきだ」と考える人が増えています。10代で約63%、20代では約57%（文化庁調べ）。書く楽しさ、見る楽しさ。誌上書展をお楽しみください。



◎創作　THE BLUE HEARTS「情熱の薔薇」

法学部4年　鈴木俊太郎

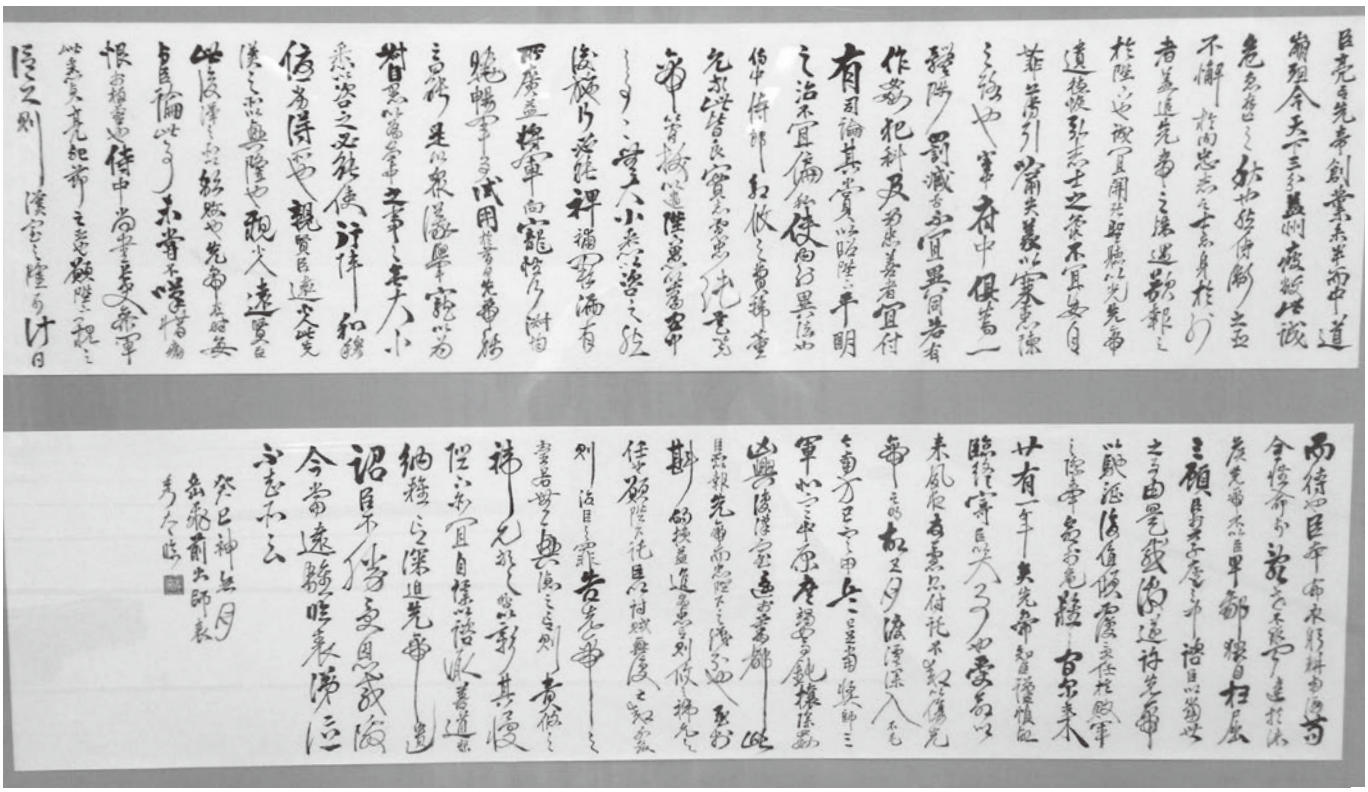
刹那の快楽に溺れることなく、一点に全力で集中すること。そしてそれを楽しむこと。長いような人生も、結局は一瞬一瞬の連続です。その一つ一つを大切にするあたたかな人間でありたい。そう思います。



◎臨書　懐素「自叙帖」

文学部3年　三浦 望

自叙帖は、草書の中でも特に“狂草体”と呼ばれています。風任せに筆が踊る、奔放な書風が魅力です。私は高校時代からずっと草書に取り組んでいますが、懐素は初挑戦でした。思うように伸びやかな線が表現できず苦労しましたが、筆を走らせる面白さを再確認した作品です。



◎全臨　岳飛「前出師表」（中央大学アートフェスティバル学長賞受賞作品）

法学部3年　川名秀太

岳飛の書による「前出師表」を全臨しました。「前出師表」は三国時代の蜀の諸葛亮が北伐するにあたり、後主劉禅に対して国を治めるための心構えを説くと共に、故昭烈帝劉備への報恩の想いを表した文章で、「文選」にも取り上げられている名文です。また、岳飛は南宋における抗金の名将であり、主君に忠を尽くし、その恩に報いるという立ち位置が諸葛亮に似ており、岳飛が諸葛亮の文章を書いたというところに運命のようなものを感じます。線質は力強く、後に行くにしたがって情感が込められ、大胆な筆運びになってゆくように思われます。